

論 文

シスモンディ研究序説

—シスモンディの生涯と彼の遺産（上）—

小 池 渺

- I. はじめに
- II. 18世紀末～19世紀前半のヨーロッパに生きたシスモンディ
- III. シスモンディ自身によっては公にされなかった彼の作品
（以上、本号）
- IV. シスモンディ自身が公にした主要な作品
- V. シスモンディが受けとって後世に伝えた文書類
- VI. 結び

I. はじめに

シスモンディ (Jean-Charles-Léonard Simonde de Sismondi) は、1773年に生まれ1842年に死んだジュネーヴの歴史家・経済学者・文学者・政治学者・時論家等々であった。ここで「ジュネーヴの」というのはごく普通の意味、すなわち「ジュネーヴに籍を置いていた」という意味であって、「ジュネーヴの社会とその歴史をとり扱った」という意味では必ずしもない。もちろん彼は、ジュネーヴに生まれ育ちジュネーヴに籍を置いていたのであるから、たんに自己の存在を確認するだけのためにも、ジュネーヴの社会を内在的にとらえ、その社会の歴史を凝視しようとせずにはいられなかったに相違ない。だがしかし、そうしようと思えば思うほど、ますます外部の世界との関係をぬきにしてはなにごとも把握しえないということを強く痛感するようになったのであろう。彼は、ジュネーヴの社会に内在してその社会の過去と現在と未来を見据えるのみにはとどまらずに、たえず視野をジュネーヴの外の世界におし広げようとしてい

た。とはいっても、当時の交通・通信手段の発達段階は今日とは比べものにならないほどに低かったから、地球上の至る所に目配りをするというようなわけにはゆかなかつた。しかも、ジュネーヴからのアクセスが比較的容易であったヨーロッパ内の諸地域は、当時、目が離せない情勢にあった。このようなわけで、シスモンディの視野は、主としてヨーロッパ内の諸地域に、せいぜいでもそれらの地域と関係が深かったヨーロッパ以外の諸地域に拡大されるにとどまった。彼は、それらの地域、わけてもヨーロッパの諸地域に生きる人々の社会とその歴史を凝視し検討の対象とするなかで、みずからのジュネーヴ人としてのアイデンティティをますます堅固なものにしていったのである。

その頃のヨーロッパは、ホブズボーム (E. J. Hobsbawm) の研究に依拠すれば、「人間が農業と冶金術、文字を書くこと、都市と国家を発明したあの遠い昔以来の人類史上最大の変化」¹⁾ とそれに伴う混乱ないしは混迷の状態にあった。広い範囲に及んだ「変化」のいわば震源は、フランスの大革命とイギリスの産業革命とであった。1789年に始まったフランス革命は、人格的に自由な国民の創出とそのような国民の内的統一に基づく国家の建設とを主要な課題とするものであった。したがってそれは、短い間ではあったが「民主主義」的な局面を迎えることができた。と同時に、反革命や外国からの干渉に直面した際には、専制と専制に呻吟する人民を普遍的に解放して世界中に自由を広めることが革命の祖国の義務であるといった信念ないしは口実のもとに、国民を動員して対外戦争にのりだすこともできた。その結果は、さしあたり、革命の「民主主義」的政治原理を無視したナポレオン (Napoléon Bonaparte) の軍事独裁の成立であり、彼による革命の総括とその成果の制度的固定化であり、さらにまた彼の軍隊によるマージナルな諸地域の占領とそれらの地域へのフランスの諸制度の普及であった。ナポレオンの敗北後、秩序の回復と平和の維持にかんする諸問題に直面したヨーロッパの諸列強間の妥協あるいは協調によって、フラン

1) E. J. ホブズボーム 『市民革命と産業革命——二重革命の時代』安川悦子・水田洋訳、岩波書店、1968年、3ページ。

ス革命以前の状態への復帰をめざす体制（ウィーン体制）が樹立された。だがしかし、そのときにはすでに、自由主義・「民主主義」・ナショナリズムというフランス革命の諸原理がヨーロッパの各地に浸透していた。そのために各国の内部に、反動政策に反対する革命的な運動が生起することになった。フランス革命の諸原理を実現させようとする運動は、ウィーン体制の崩壊のちにおいても推し進められ、ついにはインターナショナルな社会主義の運動を産み落とすと同時に、自由主義的・「民主主義」的な国民国家を現出させもした。この国家形式こそ、現代の資本主義世界のエレメンタルな政治的枠組とされているものなのであり、またこんにち欧州統合問題などに象徴的にみられるように改めてその意味が問われ始めてもいるものなのである。

ところで、いま述べたような性格の国民国家の枠組を越えてもたえず自己増殖運動を展開しようとする資本の、そして資本による、さらに資本のための生産の様式は、いまではたとえば南北問題や地球環境問題等々の形でみずからの内的矛盾を露呈させているのであるが、この生産様式は、遡ればフランス革命にわずかに先立つ時期のイギリスで「始まった」産業革命をつうじて確立されたものなのである。その産業革命は、早くも19世紀前半には、たとえば社会の一方の極における富の蓄積と他方の極における貧困の蓄積とか、過剰生産恐慌などといった形で資本主義的生産様式の内的矛盾を発現させるようになっていた。

以上のように現代の資本主義世界の存在にとってはエレメンタルな契機となっているところのいわゆる「二重革命」と、それに伴う混乱ないしは混迷の時代のヨーロッパに身を置いて、シスモンディは、その頃すでに瓦解していた、ないしはまさに廃棄されようとしていた古い形態の諸社会と、まさに形成ないしは確立されようとしていた新しい形態の諸社会との双方を見据えながら、多様な側面を有する一個の人格の全体として生きたのであった。彼はたとえば、生涯のある時期をもっぱら歴史家として旧い社会の歴史のみを回顧しながら生き、別のある時期をもっぱら経済学者として新しい社会の経済的構造のみを凝

視しながら生きるなどといった生き方はしていなかった。そうではなくして彼は、全生涯をつうじてつねに、旧い中世的ないしは近世的な諸社会とやがては変容を蒙りつつも現代の資本主義世界を形づくることになる新しい近代的な諸社会との双方をしっかりとみつめながら、歴史家・経済学者等々多様な側面をもった一個の人格の全体として思索し、行動し、著述したのである。

したがって、シスモンディの人格の全体に光をあて、彼の思想を全体としてとらえるならば、その結果として、こんにちわれわれの直面している諸問題を根底から、しかも総体的に解決してゆくうえでのなんらかの手がかりが得られるようになるであろう。といってももちろん、それらの問題の解決の方向や方策や道ゆき等が直截的な形で彼の著作の中に盛り込まれているなどというわけでは決してない。すでに明らかなように、彼が見据えていた世界はわれわれのそれとは同一ではないからである。だがしかし、両者は根底においてはつながっており、両者の間には連続する一面があるということもまた否定しがたい事実であろう。だから、上述のような世界を凝視しながら生きたシスモンディの人格の全体を明るみにだし、彼の思想を全体としてとらえるならば、その思想に内在してこれと対決し、そこから、現代の資本主義世界の表面に現われてでている諸問題を根本的かつ総体的に解決してゆくうえでの指針や示唆などをつかみとることが可能になるであろうと期待されるわけなのである。

しかるに、シスモンディについてのこれまでの研究は、彼の人格の全体に照明をあてようとしてきたであろうか。彼の思想を全体としてとらえようとしてきたであろうか。本稿においては、彼についての研究の歴史に詳しく立ち入るだけの余裕はない。だが、少なくともわが国の研究史を大雑把にふり返るかぎり、いまの問いにたいしては多かれ少なかれネガティブな答えしか思い浮かばない。もちろん若干の例外はある。志半ばで逝かれた吉田静一氏の仕事²⁾などがそれである。けれども大部分の研究は、もっぱらシスモンディの経済学者と

2) とりわけ、吉田静一『異端の経済学者——シスモンディ』新評論、1974年。

しての一面のみに光をあてようとしたものにほかならない。というよりむしろ、彼をとりまく歴史的社会的状況やその中で生きた彼の行動などには一顧だにせずして、もっぱら彼の既刊の作品の中に対象化され凝結させられた経済思想ないしは経済理論のみをとりあげて云々しているにすぎない、といったほうがよいかもしれない。しかも、その際に参照されるのは彼の経済学関係の刊行物の中でもせいぜい2点か3点の著作だけなのであって、比較的短い諸論稿にも目配りしている研究はほとんどみあたらない。ましてや経済学以外の諸分野、とりわけ歴史にかんする刊行物からさえも彼の経済思想を抽出しようとするような試み³⁾は、皆無なのではなかろうかと思われる。

これは、1つには研究者たちの問題意識に起因するのであろう。彼らの主たる関心がシスモンディの思想を全体としてとらえることにではなくして、たとえば経済思想ないしは経済理論の発展のあとをたどることや、恐慌その他の経済現象を解明することのほうにあったのだとしたら、そしてその一環としてシスモンディの経済にかんする思想や理論をコンサルトしようとしたのだとしたら、彼らのシスモンディ研究が上述のようなものになったとしてもそれはある意味では当然のことなのであり、むやみに責められるべきことではないのである。だが、わが国にいながらにして参照することのできる、ないしはその存在を知ることのできるシスモンディの労作やシスモンディ関係の文献の数は非常に限られているのであって、このことが、わが国におけるシスモンディ研究に大なり小なりの影を落としているのではなかろうかとも考えられなくはない。

3) そのような試みが現われたとしても決して不思議ではない。というのも、後段のIVの本文中に再び引用するように、シスモンディ自身がこう述べていたからである。すなわち、「私の人生〔をふり返ってみると、それ〕は、経済の研究〔の側面〕と歴史の研究〔の側面〕とに分けられる。だから、この長い叙述〔『フランス人の歴史』全29巻〕においても、〔私の〕歴史家〔としての側面〕と並んで〔もう1つの〕経済学者〔としての側面〕がしばしば姿を現わさざるをえないのである」(J. C. L. Simonde de Sismondi, *Histoire des Français*, Paris, 1821-42, t. 29, p. 515, ただし〔〕内は引用者)と。

そこで、本稿においては、いわゆる「二重革命」とそれに伴う混乱ないしは混迷の時代にヨーロッパの古い形態の諸社会と新しい形態の諸社会との双方を見据えながら生きたシスモンディの人格の全体として彼の思想をとらえようとする立場から、参照すべきと思われる一次資料の中でもとくに彼自身が作成したものと彼が受けとって後世に伝えたものとをとりあげて、それらにまつわるエピソードを交えつつ紹介してゆくことにする。本稿の副題に「彼の遺産」というのは、それらの文書類のことなのである⁴⁾。

II. 18世紀末～19世紀前半のヨーロッパに生きたシスモンディ

まず、シスモンディの「遺産」はそもそもどのようにして形成されたのであろうか。この問いにたいして詳しく答えることは、別の機会に譲らざるをえない。だが、それらの「遺産」の形成にとって、彼の視野と交際範囲の拡大が不可欠の前提的契機となっていたということだけは確かである。それでは、彼の視野と交際範囲はどのようにして拡大されたのであろうか。本節においては、こうした観点からシスモンディの生涯における足どりをごく簡単にたどってみることにする⁵⁾。

-
- 4) シスモンディのその他の遺産にかんしては、さしあたりつぎの文書を参照されたい。
Testament de Sismondi, reproduit par Jean-R. de Salis dans son Sismondi, 1773-1842, lettres et documents inédits suivis d'une liste des sources et d'une bibliographie, Paris, 1932, pp. 35-9.
- 5) シスモンディの伝記の中でもっとも包括的で詳細なものは、Jean-R. de Salis, *Sismondi, 1773-1842, la vie et l'œuvre d'un cosmopolite philosophe*, Paris, 1932 である。吉田静一氏の前掲書の中の、とくにシスモンディの生涯の事跡を書き綴った部分は、もっぱらこのサリスによる伝記のみに依拠したものではなかろうかと推察される。だがしかし、その伝記が刊行されたのちに、シスモンディの生涯と思想にかんする新たな情報を盛り込んだ文書類が大量に利用されるようになった。これを機縁に、新しい伝記の必要性を訴える声が聞かれるようになった。その必要性は、問題の文書類を利用してたとえばつぎのような成果が生みだされたのちにおいても依然として消滅してはいない。Marco Minerbi, *Introduzione alla sua edizione delle Recherches sur les constitutions des peuples libres de J. C. L. Sismondi*,

シスモンディは、ドーヴァー海峡のかなたのイギリスで産業革命が「始まった」かどうかといった頃の1773年5月9日にジュネーヴに生まれ、外の世界での生活を体験することもなく小国ジュネーヴの比較的平穏な環境の中で育った。そうして16歳になったときに、今度はすぐ隣の大国フランスでいわゆる大革命が勃発した。その革命のおりを受けて、彼は三たびジュネーヴを離れ、同じヨーロッパに属するとはいえ見知らぬ土地に身をおいて青年時代の大半を過ごすことになった。一度目は、革命の勃発に伴ってネッケル (Jacques Necker) 発行のフランス公債の価値が急激に下落し、その公債に多額の投資をしていた父親が破産同然の状態に陥ってしまったときである。そのときには、シスモンディは、父親の意を体してフランスのリヨンに赴き、同地の一商店で店員として働くことになった。シスモンディが二度目にジュネーヴを離れたのは、フランスでの革命の大波が、あたかもリヨンから彼のあとを追いかけるかのごとくにジュネーヴにまで押し寄せてきて、その小さな共和国の内部に新たな革命の渦を生じさせたときであった。このときには、少なくとも貴族の仲間だと自認していた両親に率いられて、彼は、ただ一人の妹とともにイギリスへ逃れてゆき、産業革命がなおも進行中のその国で一年半を過ごすことになった。そして三度目は、イギリスからひきあげてきたばかりの彼らが、祖国のジュネーヴで恐怖政治に際会し、シスモンディとその父が、短い間であったとはいえ投獄の憂き目をみたうえに、さらに、没収に等しい財産課税や略奪などの追いうちをかけられたときであった。このときには彼らは、家族会議を開いて対策を協議

Genève, 1965, pp. 7-75; H. O. Pappé, Introduction à son édition de la *Statistique du Département du Léman* de J. -C. -L. Sismondi, Genève, 1971, pp. 1-57. なぜなら、これらの文献はどちらも、サリスの伝記にみられる事実誤認の訂正と欠陥の補填とへの貢献を含んでいるとはいえ、あくまでも文献解題なのであって本格的な伝記といえるようなものではないからである。なお、本稿においてシスモンディの生涯における足跡に言及する際には、とくに断らないかぎり、ここに掲げた3点の欧語文献に依拠することにした。追記：本稿脱稿後につぎのシスモンディ伝を入手した。Paul Waeber, *Sismondi, une biographie*, tome 1: *Les devanciers et la traversée de la Révolution, chroniques familiales 1692-1800*, Genève, 1991.

し、不動産の一部を処分してイタリアのトスカーナ大公国に亡命することを決定した。こうして住みついたのが、ペッシャの集落の近くのいわゆるヴァルキウーザの家屋付農園であったのである。シスモンディの妹サーラ(Sara, 結婚後はSerina)は、やがてペッシャの貴族アントン・コズィーモ・フォルティ(Anton Cosimo Forti)と結婚し、死ぬまでその地を離れなかった。シスモンディ自身は、数年間そこに暮らしたのち、活躍の舞台を求めてひとりジュネーヴへの帰路に就いた。それは、軍事独裁を樹立したナポレオンがイタリア遠征にのりだしたときから数えて約半年後の1800年秋のことであった。そのときにはすでに、ジュネーヴはフランスに併合されていた⁶⁾。

フランス革命後のヨーロッパは、いよいよ混乱ないしは混迷の度を深めていった。フランスでは、古い秩序が破壊されたあと、それに代わる新しい秩序はなかなか確立されなかった。そのフランスと同じような状況を、革命戦争に続いて1800-14年のナポレオン戦争が、イタリアをはじめとしてヨーロッパのあちこちにつくりだした。と同時にそれらの戦争は、ヨーロッパの全域においてコンサーヴァティズムとナショナリズムとを刺激した。ナポレオンの率いる軍隊とそれに対抗する諸列強の軍隊とのせめぎあいは、結局のところ後者の勝利に終わった。ナポレオンは退位を余儀なくされ、ウィーン会議が始まった。その会議は、共通の敵を失った諸列強間の利害対立にはばまれて容易には進展しなかった。ナポレオンのエルバ島脱出の知らせが届いてはじめて、諸列強は妥協に向かったにすぎない。しかも、最終的に妥協が成立したときにはすでにナポレオンが政権の座に返り咲いていた。1815年のいわゆる百日天下である。

その終焉とともにようやく樹立されるに至ったウィーン体制は、ヨーロッパの混乱ないしは混迷にいっそうの拍車をかけた。フランスでは、革命による

6) ジュネーヴは、1798年にフランス人によって占領され、同年のうちにレマン県を構成する3つの郡の1つとしてフランスに併合された(Cf. Pappé, *op. cit.*, p. 7; Salis, *Sismondi, 1773-1842, la vie et l'œuvre ...*, p. 75, n. 1)。ちなみに、フランスからのジュネーヴ共和国の独立が宣言されたのは、1813年12月31日のことであった(Cf. Salis, *ibid.*, p. 227)。

諸変化のうちの幾つかは容認されたけれども、23年も前に人民の意思によって廃止されたはずの王権（絶対君主制）が再び承認させられた。また、同国の国境線は25年も昔のところにまでおし戻された。長い間フランス領あるいはフランスの同属国、衛星国とされていた諸地域の運命は、急激に変化させられた。しかも、長期の戦争によって息吹を与えられたナショナリズムは、自由主義ともども抑圧された。そうされることで、両者の運動はかえって勢いを増していった。たとえば、イタリアではリソルジメント運動が活発化した。ギリシャは独立をかちとった。ドイツ連邦においても、ナショナリズム・自由主義の運動と反動政策とが激しく対抗していた。フランスでは、反動政策に耐えかねた諸勢力が一致団結して1830年に革命を起こし、わけても自由主義勢力の主導のもとに七月王政（立憲君主制）を樹立した。と思いきや、政府の側に立った穏健な自由主義者は、復古王政反対のためにともに闘ったかつての同盟者たちを裏切ったり弾圧したりするようになった。自由主義の先進国イギリスにおいてもまた、その限界を暗示するような現象が経済の面に現われでていた。産業革命の進行に伴って、イギリス資本主義は、めざましい生産力の発展を遂げると同時に、その反面で、失業や窮乏や恐慌を生じさせもしたのである。

1800年秋に「ヨーロッパ大陸の中央に位置するイギリス的な都市」⁷⁾ ジュネーヴに帰ってきたシスモンディは、その後も相変わらずたびたびジュネーヴを離れてヨーロッパの各地に足を運んだ。とりわけ1820年頃までは、枚挙にいとまがないほど頻繁にジュネーヴを出たり入ったりしていた⁸⁾。といっても今度は亡命のためではなく、社交や旅行や著作活動などのためであった。彼は、恩師をはじめとする地元の人たちとジュネーヴで近しくつきあっただけではなかった。最初の2つの著作が成功を収めたのちの数年間、ジュネーヴから少し

7) Salis, *ibid.*, p. 74.

8) サリスの伝記に基づいて1800年秋からの20年間におけるシスモンディの足どりをたどってみると、彼がもっとも長くジュネーヴに留まったときに3年8カ月であったということがわかる。

離れたところにある Coppes のシャトーに足繁くでかけていって、当時そこに隠棲していたスタール夫人 (Madame de Staël) のサロンに常連として参加した。そうする中で、スイスはもとよりフランスやドイツの著名な人物とも知りあいになった。スタール夫人ら、ごく少数の人たちとは、初めて出会ったときから彼女が死ぬまでの十数年の間に三度も外国旅行をともにするほどの仲になりさえした。一度目と三度目はイタリアを、そして二度目にはドイツ連邦を歩き回ったのであるが、その三度の外国旅行は、同道の一人が、ネッケルの娘でフランス駐在スウェーデン大使と結婚した女流文学者としてその名をすでにヨーロッパ中に馳せていたスタール夫人であっただけに、シスモンディの交際範囲を著しく拡大させることになった。彼は、イタリアへは単身でもしばしばでかけていった。そうしてペッシャのヴァルキウーザの屋敷に滞在していた間は、両親——ただし父親は1810年没——や妹の家族らと談笑したり公にするための原稿を執筆したりした。シスモンディはさらに、フランスの土をも何度か踏んだ。パリでは、自著の校正などのために出版社を訪れるかたわら、Coppes のグループのメンバーを含む論壇・文壇・学界の重鎮や社交界の花形、それに、百日天下期のナポレオンのような政界の大立者ともじかに会って話を交わした。

1819年にイギリス人の女性ジェスィー・アレン (Jessie Allen) と結婚したこともあってか、シスモンディは、それまで彼が「世界で一番愛するひと」⁹⁾と呼んで憚らなかつた母親が1821年にペッシャで死去したのを機縁に、最終的にジュネーヴに永住しようと決心した。その後の彼は、ジュネーヴの自宅で定期的にサロンを開いて、たとえば夫人の親戚縁者をはじめとするイギリス人、やがてフランスの大統領となるルイ・ナポレオン (Louis Napoléon) らのフランス人、のちにリソルジメント運動の指導者の1人となるカヴール (Camillo Benso

9) Lettre de Sismondi à M^{me} d'Albany, Genève, 16 août 1811, dans les *Lettres inédites de J. C. L. de Sismondi, de M. de Bonstetten, de Madame de Staël et de Madame de Souza à Madame la Comtesse d'Albany*, publiées par Saint-René Taillandier, Paris, 1863, p. 142.

Cavour) らのイタリア人、さらには、独立闘争に携わっていたギリシャ人や彼らに共感を示すロシア人等々を迎え入れ、彼らとの会話をつうじていながらにしてヨーロッパ中の動きをいわば観察するようになった。と同時に、その一方でシスモンディは、以前と比べればさすがに回数こそ減ったものの、相変わらずヨーロッパのあちこちへ自分のほうから出向いてゆきもした。今度は夫人とともにである。2人は、七月革命直前のパリや、第1回目の周期的過剰生産恐慌の勃発の前年と翌年におけるイギリスをも訪問していた。1832年にジュネーヴの市街地の家売り払って郊外のシェーナに引越したことは、シスモンディ夫妻の生活にあまり大きな変化をもたらさなかった。彼らはひき続き、仕事の合間にヨーロッパ各地の人々を自宅のサロンに迎え入れながら、みずからも何度か自宅を離れてヨーロッパの各地を訪れ、とくにペッサを訪問した際にはシスモンディは著作のための仕事もしたのである。彼の生前最後の旅は、夫人と連れだつてのイギリス旅行であった。1840年のその旅行の最中に、シスモンディを死に至らしめる病の症状がはじめて顕在化した。大事をとって彼と夫人は、ベルギーやドイツを回る計画を放棄してロンドンからシェーナの自宅に直行した。それから2年と経たないうちに、シスモンディはついに子を遺すこともなく、帰らぬ旅の人となった。それは、1842年6月25日のことであった。

以上のように、シスモンディは、いわゆる「二重革命」とそれに伴う混乱ないしは混迷の時代のヨーロッパに生きた。彼は、ジュネーヴを起点とし終点としながら何度となくヨーロッパのさまざまな地域を訪れた。そうする中で、みずからの交際範囲を広げ、視野を拡大させていった。と同時に、その当時すでに瓦解してしまっていた、ないしはまさに廃棄されようとしていた旧い形態の諸社会と、まさに形成ないしは確立されようとしていた新しい形態の諸社会との双方を見据えながら思索し、行動し、著述したのである。そしてそのことがまた、彼の視野と交際範囲をますます拡大させる結果となったのもある。これらのことは、彼の思索と行動のあとをたどってみればさらにいっそう明確になるであろう。

Ⅲ. シスモンディ自身によっては公にされなかった彼の作品

シスモンディの生涯における思索と行動のあとは、彼が遺したさまざまな種類の「遺産」の中にしるされている。それらの「遺産」は、いろいろな観点からいろいろに分類することができるであろう。本稿においては、まず、誰によって形成されたものかという観点から、それらの「遺産」を、シスモンディ自身が作成したものとそうでないものとに大別する。そのうえで、前者をさらに、シスモンディ自身によって公にされたか否かという観点から2つの種類のものに分けることにする。このうちの、シスモンディ自身によっては公にされなかったものをとりあげて紹介するのが、本節の課題なのである。

そのようなものとして、まず第一に、日記や手紙(葉書を含む)の類がある。シスモンディは、その生涯の間に、龍大な量の日記や手紙を書き遺した。彼は、ジュネーヴやシェーナにとどまっていた間はもちろんのこと、そうでないときでも行く先々で日記をつけ、手紙を認めていた。そのような習慣がいつごろ身についたのかはわからない。だが、遅くともイタリアのペッシャに亡命していたころには、彼は、自分の身の回りに起こったできごとや自分自身の読書をはじめとする行動を、あるいはそれらについての感想や解説や見通しを、あるいはさらにそのときどきの心境や願望や意志や構想等々を、日記や手紙に書き記すようになっていた。とくに日記にかんしていうならば、毎日欠かさずそれをつけていたのかどうかもつまびらかではない。だが、たとえば1834年7月29日付の、妹の死を悼む彼の日記を読んでみると、そこにはつぎのように記されている。「私はこれまで片時も忘れずに彼女に手紙を書いてきたが、そうしておいてよかった。私達の母が死んでから、私は715通の手紙を彼女に書き送った」¹⁰⁾と。これによるなら、シスモンディは、彼の母親が死んだ1821年9月30

10) Journal de Sismondi, 29 juillet 1834, dans J. C. L. de Sismondi, *Fragments de son journal et correspondance* [publiées par Montgolfier], Genève et Paris, 1857, p. 96.

日¹¹⁾から1834年7月29日までの13年弱の間、平均すると週に1通余りの割合で妹に手紙を出していたことになる。しかも、彼が手紙を書き送った相手はもちろん妹だけではなく。同じ期間中に彼は、何人もの人にあてておびただしい数にのぼる手紙を認めていた¹²⁾。これらの事情を考えあわせると、シスモンディの生涯においては手紙が日記の代わりをつとめた日もあったのではなからうかと思われてくる。少なくとも彼の母親が神に召された頃からは、日曜日の礼拝後の時間は手紙を書くためにとっておかれたようである¹³⁾。いや、シスモンディの伝記作家サリスによれば、週日であっても彼は暇さえあれば手紙を書いていた。「そうすることを楽しい務めと考え、避けがたい喜びと感じていたのである」¹⁴⁾。実際シスモンディは、生涯の間に尨大な量の手紙を書いた。おまけにその中の多くのものについては、下書きまで書いていた。それらの手紙のあて先は、家族や親戚縁者であったり、ヨーロッパの、いや欧米の各地に散在する友人・知人であったり、あるいはまた出版社などの私的企業や公的機関であったりした¹⁵⁾。さらに、日記や手紙に類するものとして、シスモンディは、日常の私生活にかかわるごく簡単なメモや、相異なる日付をもった2通の遺言状と2通の遺言補足書¹⁶⁾などを書き遺してもいる。ただし、彼が遺した日記や手紙類は、そのすべてがいまに伝えられているというわけではない。とく

11) Cf. Salis, *Sismondi, 1773-1842, la vie et l'œuvre ...*, p. 383. シスモンディの母親の没年月日について、吉田静一氏はそれを「1821年6月30日」と書き記している（前掲書、114ページ）が、これは恐らく誤記または誤植であろう。

12) シスモンディの書簡集としてはつぎの文献がもっとも浩瀚なものなのであるが、そこに収録されている当該期間中の彼の手紙は、全部で166点にのぼる。G. C. L. Sismondi, *Epistolario raccolto*, a cura di Carlo Pellegrini, 4 vol., Firenze, 1933-54.

13) Cf. Avant-propos à Sismondi, *Fragments ...*, p. VIII.

14) Salis, *Sismondi, 1773-1842, la vie et l'œuvre ...*, p. VIII.

15) Cf. Carlo Cordié, I corrispondenti del Sismondi, negli *Atti del colloquio internazionale sul Sismondi*, (Pescia, 8-10 settembre 1970), Roma, 1973, pp. 215-45.

16) 前注4に掲げた文書。

に日記は、大部分が、彼の死後まもなくの頃に焼却されてしまった。手紙についても、その一部分は彼の死後に焼却されたり紛失してしまったりしているようである¹⁷⁾。

以上のものを書いたときと同様に彼には公表の意図はなかったらしいのだが、シスモンディは、つぎのような芸術的・文学的な作品をも書き遺していた。彼がその青年時代に亡命の地において家族や使用人らの心を和ませるためにつくったのであろうと考えられる¹⁸⁾ものに、たとえば数曲のフランス風コントルダンス¹⁹⁾、7編から成る叙事詩「市長」、一幕の喜劇「ねたみ屋の粗忽者」、何号かに及ぶイタリア語の諧謔的自家新聞「双眼鏡」²⁰⁾などがある。青年時代を過ぎてからも、彼は折にふれて母親やジェスィーらのために叙情詩を書いた²¹⁾。また、とくにコッペのスタール夫人のサロンに出入りしていた頃には、たとえばゲーテの詩の翻訳を手がけたりもした。その訳詩の一編は、1808年のクリスマスの折にドイツの親しい友人に贈られた²²⁾。

シスモンディは、さまざまな分野にかんすることを学ぶために青年時代の初め頃までは学校に通い、授業に出席して丹念にノートをとっていた。それ以降においては、ヨーロッパのあちこちで現地調査を行ったり自分の書斎にこもっていろいろな文献を読んだりしながら、これまでに紹介した書きものに加えて

17) これらの点にかんしては、さしあたりつぎの諸文献を参照されたい。Pascal Villari, *Une conversation de Napoléon I^{er} et de Sismondi*, *Revue historique*, 1 année, tome 1, janvier-mars 1876, pp. 240-41; Salis, *Sismondi, 1773-1842, la vie et l'œuvre ...*, pp. VII, 377, etc.

18) Cf. Villari, *op. cit.*, pp. 238-39.

19) Cf. journal de Sismondi, 1798, dans Sismondi, *Fragments ...*, p. 66.

20) 以上の3点については、Villari, *op. cit.*, pp. 241-42 を参照。

21) これらの詩は、シスモンディの手紙の中にみいだされる。前注12に掲げた書簡集のほかに、たとえばつぎのものをも参照されたい。G. C. L. Sismondi, *Epistolario*, vol. 5: *Lettere inedite a Jessie Allen, (Madame de Sismondi)*, a cura di Norman King e Robert de Luppé, Firenze, 1975.

22) Cf. Salis, *Sismondi, 1773-1842, lettres et documents inédits...*, p. VIII. なお、同書の40-1ページには、当該の訳詩が掲載されてもいる。

さらにつぎのような自己研鑽用の資料をも作成した。すなわち、1797年の開花順に排列された押し葉や水彩の写し絵を含めてペッシャー帯の植物の観察ないし調査の記録、農具等のデッサンを含むトスカーナの農村の現地調査の記録²³⁾、諸外国語の練習帳、「ジュネーヴ・アカデミーの法学生 G. C. L. シモンドゥ、1793年3月8日、ロンドンにて起筆」と表記されたノート「ドゥロルム、ウッドゥスン、ブラックストウンの諸著作からのイングランド憲法にかんする抜粋」全3巻²⁴⁾をはじめとする、さまざまな言語で書かれた諸文献からの法律・政治・植物・農業・経済・歴史・文学・哲学などにかんする内容の抜き書き、諸文献についての注記やコメント、特定の諸問題についての要覧や覚え書きや試論、等々をである²⁵⁾。ちなみに、シスモンディが植物や農業や経済にかんする資料をも作成するようになったのは、根源的には彼が亡命先のペッシャにおいて農園の経営に従事していたことによるのであろう。農園の経営には、まだペッシャの土地になじみのなかった彼自身とその家族の生活がかかっていた。しかも当時の彼にとっては、リヨンの商店で簿記係を務めた経験はあったものの、農園の経営という仕事は初めてのものであった。だから彼は、その土地の植物や農法を観察したり、調査を周辺の農村の諸産業に及ぼしたり、あるいはさらに、関係のありそうな諸文献を繙読したりして、植物や農業や経済にかんする資料を作成するようになったのであろう。とはいえ、ペッシャ亡命中

23) 農具等のデッサンについては、つぎの文献の綴じ込みにもそれを認めることができる。J. C. L. Simonde [de Sismondi], *Tableau de l'agriculture toscane*, Genève, 1801.

24) Cf. Ettore Passerin, Appendice al suo scritto intitolato 'Un inedito saggio del Sismondi sui problemi dell' economia toscana all' inizio dell' occupazione francese del 1799', *Rassegna storica del Risorgimento*, anno 38, fasc. 3-4, luglio-dicembre 1951, p. 560.

25) ここに掲げたものについては、たとえばつぎの諸文献をも参照。Villari, *op. cit.*, pp. 241-42; H. O. Pappé, The Significance of the 'Raccolta Sismondi' at Pescia for the Interpretation of Sismondi's Life and Work—Prolegomena to a New Biography, in *Atti del colloquio internazionale sul Sismondi ...*, p. 162.

のシスモンディは、もちろん農園の経営に専念していたわけではなかった。彼は、かねてからの法律や政治にかんする研究を続行し続けた。そうする中で、彼は、歴史にかんする資料の作成にも手を染めるようになったのである。

シスモンディがみずからの作成した日記や手紙類、内輪向けの芸術的・文学的作品、それに自己研鑽用の資料などをもとにしながら最初から公表を意図して原稿を執筆するようになったのは、あるいは少なくとも原稿を執筆している間に公表することを思いついたのは、彼がペッサに亡命していた期間中のことであつたようである。その種の原稿の中でもっとも早い時期に書き始められたと考えられているものは、「自由な諸人民の政体にかんする研究」である²⁶⁾。シスモンディ自身の説明によれば、10篇構成のこの原稿は、1796年に起筆された。それから5年の間に全体の¼が、ほぼ完全に仕上げられた。だが、「第6篇」の「イタリアの諸共和国の政体にかんする研究」は、彼に、それらの共和国の歴史を研究することを余儀なくさせた²⁷⁾。1798年、彼は時を移さずその研究にとりかかった。そして早くも同年の間には、独自のイタリア諸共和国史の執筆を決意しさえするようになった。しかも、この原稿の未完成の部分を上げるためには、当時の彼はまだ余りにも未熟であつたということである²⁸⁾。だから彼は、とりあえず自分の納得しうる「¼」の部分だけでもそれを公刊して

26) この原稿の一部分は、ミネルビによって編集されたいうえで1965年に公にされることになった。J. C. L. Sismondi, *Recherches sur les constitutions des peuples libres*, pubbligate da Marco Minerbi, Genève, 1965.

27) シスモンディがイタリアの諸共和国の歴史を研究するようになった経緯について彼自身が行っているこの説明は、従来あまり顧みられることがなかつたのではなからうかと思われる。上記の経緯についての従来の解説は、たとえばつぎの文献にみられるようなものであつた。Salis, *Sismondi, 1773-1842, la vie et l'œuvre ...*, pp. 31-5, etc. これに対応する吉田静一氏の解説は、前掲書の28ページにみいだされる。

28) Cf. J. -C. -L. Simonde de Sismondi, Une note inédite sur ses écrits, qu'il a tracée de sa main peu de semaines avant sa mort, citée dans [David François Munier,] *Notice sur J. -C. -L. de Sismondi*, (Extrait de l'*Album de la Suisse romande* -Mai 1843), s. l. n. d., pp. 3-4.

おくことにしようと考え、遠くはイギリスの出版社にまで問い合わせの手紙を送ったのであろう。だがしかし、そうした彼の努力は、当時のヨーロッパの混乱した、ないしは混迷を深めつつあった政治情勢のためにことごとく水泡に帰した。彼がこの原稿の公刊を最終的に思いとどまったのは、1802年以降のことであったようである²⁹⁾。その後、問題の原稿はひとまとめにされてジュネーブの彼の書齋に研究用の資料として保管されることになった。それは、彼がみずからの手で公にしようを試みたと考えられる部分については原初稿と改訂稿と清書稿とから、またその他の部分については原初稿と部分的には改訂稿とから成っていたようである³⁰⁾。

これと同様につきの原稿もまた、公刊を予定されながらシスモンディの生前にはついに日の目をみることがなかった。その原稿とは、すなわち、「トスカナの諸資源、または経済の3つの重要問題にかんする考察」というタイトルをもった原稿のことである³¹⁾。そのタイトルのすぐ下のところには、「フランスの市民 J. C. L. シモンドゥ著」³²⁾と明記されており、さらにその次の行には、「フィレンツェ農芸学会通信会員」という肩書きが添えられている。この原稿には、少なくとも2つの版がある³³⁾。そのうちの1つには「はしがき」が含まれており、そこにはこう書き記されている。すなわち、「この小さな著作は……本来ならいまごろに出版されるはずであった。あれ〔1799年4月末〕以

29) Cf. Minerbi, *op. cit.*, pp. 9-20.

30) Cf. Passerin, *op. cit.*, p. 560; Minerbi, *op. cit.*, p. 20.

31) J. C. L. Simonde [de Sismondi], *Les ressources de la Toscane, ou réflexions sur trois questions importantes d'économie politique*. この原稿は、イタリア人の研究者（多分 Gabriele Turi）によって編集されたうえで、恐らく1951年以降になんらかの著作または論文の付録として公表された。その抜刷は、シスモンディ自身の原稿の現物とともに、ベッシャ町立図書館（Biblioteca Comunale di Pescia）に保管されている。

32) ここでシスモンディがみずからを「フランスの市民」と称している理由については、前注6を参照されたい。

33) 前注31に掲げた抜刷の318ページの脚注をも参照。

来、トスカーナの情勢はひどく変わってしまい、その諸資源は恐るべき危機に晒されるようになった。しかしながら、著者は、5月4日の宿命的な蜂起に先立つ時期におけるそれらの資源の状態を世に伝えるために、この著作を原状のまま存続させるべきであると考えた。ただし、このすばらしい国の不幸なできごとによって促された省察を、補遺の形でつけ加えることにしたい。1799年5月、ペッシャにて³⁴⁾と。これによれば、当面の原稿の2つの版はどちらも公刊を予定されたものであったようである。にもかかわらずそのいずれもが、「製造業の活力を回復させるための諸方策」にかんする「第1講」または「第1部」だけで終わっており、それに続くはずの「第2講」または「第2部」と標記された原稿はどこにもみあたらない。焼却や紛失の可能性を示唆するものもない。ということは、現存する原稿はシリーズものの第1分冊のそれとして構想され、冒頭に掲げられたタイトルはそのシリーズ全体にかんするものであったということなのであろうか。かりにそうだとしたら、なぜそのシリーズは第1分冊用の原稿のみに終わってしまったのか、また第2分冊以降はどのような内容のものになるはずであったのか、といった疑問が生じてくる。このうち前者の疑問については、比較的容易に解消されるかもしれない。それは、いま引用した「はしがき」の一節からも推測されるように、トスカーナの混乱した、ないしは混迷する政治情勢のためにシスモンディにとっては第1分冊の刊行さえままならなかったからであろう。この原稿に分析を加えたパッセリンによれば、1799年当時のトスカーナにおいては、同年3月25日のフランス軍のフィレンツェ入城に伴ってフランスに対抗するナショナリズムの運動が高まった。その運動は、シスモンディのいうように5月の「4日」ではなく6日の蜂起をもって頂点に達したということである³⁵⁾。そうした中で、「フランスの市民 J. C. L. シモンドゥ」は1799年7月30日に逮捕、投獄され、裁判の末に同年10月6日にはついにトスカーナからの永久追放令を受けることになっ

34) 同上の抜刷の318ページ。ただし、[]内は引用者。

35) Cf. Passerin, Un iedito saggio del Sismondi ..., pp. 548-49 e 553.

た³⁶⁾。つまり、彼にとっては「トスカーナの諸資源」第1分冊の刊行の機会がごく限られていたか、またはまったくなかったわけなのである。ましてや第2分冊以降の原稿を執筆する余裕などなかったに相違ない。ところでその第2分冊以降については、シスモンディはどのような構想を抱いていたのであろうか。この疑問をめぐっては、いまのところ推測の域を一步も脱しえない。とはいえ、つぎのような解決案を裏づけることは必ずしも見込みのないことではないかもしれない。その解決案とは、すなわち、上掲のタイトルにいうところの「経済の3つの重要問題」のうちの1つ、「製造業」にかんするそれを第1分冊の原稿においてとり扱ったシスモンディは、続く第2、第3分冊の原稿においては、それぞれ「農業」、「商業」にかんする「重要問題」をとりあげるつもりであったのではなからうか、というものである。いずれにせよ、1799年当時のシスモンディの構想が発展的に解消させられた結果として、『トスカーナ農業概観』（1801年刊）と『商業の富について』（1803年刊）という後年の彼の2つの独立した著作が誕生したのであるように思われるのである。ちなみに、前者の著作の原稿が執筆されたのは、一般には、1799年10月頃からの約1年の間のことであったと推定されている。

以上のような原稿や資料等を携えて1800年10月に亡命先のイタリアから故郷のジュネーヴに帰ってきたシスモンディは、ただちにその都市のもっとも有名な発行所を訪れて、書きたての原稿「トスカーナ農業概観」の出版の交渉を開始した。うまい具合にその交渉がまとまって1801年の1月か遅くとも2月には、彼は生まれて初めて自分の原稿を実際に世に問うことができた。それはたちまち、ジュネーヴを中心とするフランス・レマン県の知事らの間に反響をよんだ。早くも同年の6月には、シスモンディは、レマン県の商業・技術・農業委員会の創設メンバーに迎えられ、あわせてその委員会の書記の役目をもひき受けることになった。その後、1813年までの12年間は、彼は著作活動のかたわら、行政官としての資格においてたとえばつぎのような文書や原稿を作成しも

36) Cf. Minerbi, *op. cit.*, pp. 10-4.

した。

そもそも上記の委員会の創設を定めたレマン県の条例からしてが、恐らくはシスモンディ自身の筆によるものであったと推定する向きもある³⁷⁾。それはともかくとしても、委員会においては書記を務めていたわけであるから、シスモンディは議事録を作成したに違いない。少なくともその委員会が改組されて1802年にレマン県商業会議所が設立されることになったあとの約2年間は、彼は、その新たな機関の書記としてまぎれもなく議事録をとっていた。しかも、同会議所の設立当初においては、その沿革や設立の趣旨や運営方針などをフランスの他の諸県の商業会議所に披露するための文書まで作成していた。レマン県の先の委員会から商業会議所が引き継いだ役割は、同県の経済の中でもとくに商業の状態にかんして綿密な調査を実施し、その調査に基づいて中央政府にたいする報告や陳情の原案をまとめあげ、そうしてその成果を知事に提出するというようなものであったらしいのだが、委員会の当時と同様に会議所の開設後においてもまた書記兼務のメンバーとなったシスモンディは、それらの活動に従事する中でさらに、会議所での審議のための資料を、それもたんに参考に供する程度の断片的なものばかりではなく審議の全体のたたき台となるような包括的な文書をも作成した。この種の文書の中には、たとえば1803年6月20日の日付をもつ「1789年当時と比較した〔フランス共和暦〕第11年のジュネーヴの商業の状態にかんする覚え書き」と題する文書のように、ほとんど、あるいはまったく手を加えられないまま会議所の、さらには知事の承認を得て中央政府に提出されることになったものも少なくないようである³⁸⁾。また、シスモンディは、中央政府に提出されることにはならなかったものの知事のためにみずから作成した文書の原稿の1つを推敲し、比較的短い書き下ろし原稿をそれにつけ加えて、1802～3年に『レマン県の統計』という標題の著作を公にし

37) Pappe, Introduction ..., p. 8.

38) Cf. Pappe, *ibid.*, pp. 8-11; Salis, *Sismondi, 1773-1842, la vie et l'œuvre* ..., pp. 76-9.

ようとしさえした。ただしその企画は、彼の生前にはついに実現されなかった。理由は、シスモンディの死後に彼に代わってその企画を実現させたパップによれば、当時のジュネーヴの不安定な経済情勢のもとでは順調な売れ行きが見込めなかったこと、フランス全体についてみても同国は戦争や検閲などに伴う経済的かつ政治的な困難の極みにあったこと、とりわけジュネーヴにおいては政治的色彩を帯びた文書の発行は至難の業であったこと、しかもレマン県においてはシスモンディの信仰する「ジュネーヴの宗教」とカトリック教との宗教的な対立が政治的なそれらにまで発展しつつあったこと、等々であった³⁹⁾。ちなみに、シスモンディは、1801～2年にはレマン県の工業製品の審査委員を兼任していたらしいので、その方面においてもなんらかの記録や覚え書きを作成したのではなかろうかと思われる。

また、とくに1802年9月から1806年9月までの4年の間には、シスモンディは、事業家としての資格においても文書やメモなどを書き綴った。当時の彼は、レマン県の行政官としてマクロ的な観点からばかりでなく、同時にジャン・シャルル・レオナル・シモンドゥ商会の経営者としてミクロ的な観点からも、同地の商業の現状を把握し、その発展を企図していたようである⁴⁰⁾。

さらに、1810年前後からはシスモンディは、教授としての資格において講義のための原稿を執筆するようにもなった。彼は、1809年にアカデミー・ドゥ・ジュネーヴの哲学の教授に任命され、1811年冬から翌12年にかけての学期にヨーロッパ南部の文学にかんする講義を担当することになった。そのときには、若い頃から自分で作成してきた文学関係の資料をもとに龐大な量の講義用原稿を執筆した⁴¹⁾。ちなみに彼は、その原稿に若干手を加えて、1813年に『南欧文学論』という著作を公刊した。また、彼は、1820年には歴史学の名誉教授に任命され、同年冬から翌年にかけての学期に歴史の講義を担当することになっ

39) Cf. Pappé, Introduction ..., pp. 11-3.

40) Cf. *ibid.*, pp. 11-2.

41) Cf. Salis, *Sismondi, 1773-1842, la vie et l'œuvre* ..., pp. 46-7.

た。このときには自作の歴史関係の資料と、自著の『中世イタリアの諸共和国の歴史』とをともにしながら、先と同様に膨大な量にのぼる講義用原稿を執筆した。ちなみに彼は、その原稿を書き直して1835年に『250年から1000年までの間におけるローマ帝国の崩壊と文明の衰退の歴史』という著作を公刊した⁴²⁾。

1813年12月31日のジュネーヴ共和国の独立と同時に行政職を退いたシスモンディは、今度は祖国ジュネーヴの政治に深くコミットして、関係機関への請願書などをも作成するようになった。1814年8月、ジュネーヴの臨時政府が憲法草案をまとめあげると、シスモンディは単独で、また共同で、すかさず臨時参事院にたいして草案の慎重な審議を、あるいはその部分的な修正を、あるいはさらに国民投票の延期を求める請願書を書き送った⁴³⁾。ちなみに、有権者の圧倒的多数の承認を得て正式に憲法が制定されると、それにのっって早くも同年9～10月には最初の代議院議員選挙が実施され、その後は毎年30名ずつ議員の改選が行われることになったのであるが、第1回目の選挙で当選を果たしたシスモンディは、1841年11月に至るまで代議院議員として演説の機会をもち続けた。その間に彼が演説用の原稿を作成したのかどうかは、つまびらかではない。少なくとも代議院の規約では、臨機応変でない筋書きどおりの演説は禁じられていた。そのために彼は、議員になった当初は即興による演説の練習までしていたのだそうなのである⁴⁴⁾。このことから、かりにシスモンディが演説用の原稿を作成していたとしても、それはごく短期間のことであったに違いないと思われる。また、1842年3月にはシスモンディは、立憲議会の議員に選出され、最後の力をふり絞って演壇に上った。そのときの演説のために原稿が用意されていたのかどうかについても、詳しいことはわからない。ただし、壇上の彼は、「一区切りごとに息を切らせ……ついに最後まで話すことは

42) Cf. *ibid.*, p. 439.

43) Cf. *ibid.*, pp. 239-41.

44) Cf. *ibid.*, pp. 225-56.

できなかった」⁴⁵⁾ そうである。ということは、その演説には最初から筋書きがあったということなのであろうか。いずれにせよ彼は、そのときの、あるいはそのときまでに彼自身が予定していた、あるいはさらにそのときが過ぎてから彼自身によって補完された演説の内容を、後日、活字の形式において公にしている⁴⁶⁾。

最後に、1800年10月以降のシスモンディは、彼自身によって実際に公にされた著作や論文などのための下書き原稿をも作成した。彼の場合、一度も書き直しをせずに原稿を印刷に付してしまうというようなことは、ほとんど、あるいはまったくなかったのではなかろうかと思われる。1つのタイトルの出版物のために、部分的にであれそうでなけれ回数書き直しを行うといったことも稀ではなかった。ただし、彼は起筆または脱稿のたびごとに日付を書き入れていったわけではないので、同一のタイトルを有する彼の諸原稿のうちのいずれが原初稿であり、いずれが改訂稿であり、そしていずれが再訂稿等々であるのかを特定することは、必ずしも容易ではない。だが、それらの下書き原稿の中には貴重な情報が盛り込まれている可能性もある。

以上においては、シスモンディが形成した「遺産」の中の、彼自身によっては公にされなかったものをとりあげて紹介するかたわら、それらが形成された頃の彼自身の性状ないしはルーティーンにも言及してきた。そこからすでに明らかかなように、彼は、いわゆる「二重革命」とそれに伴う混乱ないしは混迷の時代のヨーロッパに身を置いて、たとえば事業経営、現地調査、観察、読書、資料作成、創作、日記や手紙や原稿などの執筆、講義や演説や請願、等々といった多様な活動を展開し、やがて彼の「遺産」として後世に伝えられることになるものをつぎつぎと生みだしていった。そうする中で、彼は、みずからの視

45) Alphonse de Candolle, *Sismondi considéré comme citoyen genevois*, (Extrait du tome XXIII des *Memoires et Documents* publiés par la Société d'histoire et d'archéologie de Genève), Genève, 1888, p. 29.

46) *Discours de M. de Sismondi à l'Assemblée constituante, le 30 mars 1842*, Genève, 1842.

野をいよいよ拡大させ、交際範囲をますます広げていった。つまり、一方において彼の交際範囲と視野の拡大が彼の「遺産」の形成にとっての不可欠の前提的契機となっていたのだとしたら、他方においては逆に、彼の「遺産」形成の活動そのものをつうじて、彼の視野と交際範囲がいっそう拡大されることにもなったのである。この点はずきに、彼が形成した「遺産」の中でもとくに彼自身によって公にされたものをとりあげて紹介してゆくならば、一段と明確になることであろう。

（未完）

（本稿の作成にあたっては、1990年度の関西大学経済学部共同研究費を利用した。）